

弘大・城田准教授 最終講義

最終講義で語る城田安幸准教授



目玉風船考案 共生の意義説く

防鳥用の目玉風船考案などで有名な弘前大学農学生命科学部の城田安幸准教授(進化生物学)が今春定年退職を迎える。2日に行われた最終講義には現役学生に加え、今は教員として活躍するかつての教え子ら約150人が集まり、熱心に耳を傾けた。

城田准教授は目玉風船の

ほか、航空機ジェットエンジン、抗がん効果のあるリンゴの未熟果実を混ぜたリングジュースを開発したりと、幅広い研究に取り組んできた。

最終講義のテーマは「ダーウィンを超えてー寛大で豊かな『敗北者』たち」。学生時代の恩師から、一生

の宿題として「ダーウィンを超えなさい」と言われたエピソードなどを披露。最初に書いた論文の題材がボウフラだったことから「ボウフラと人間は遺伝子的には67%兄弟。ボウフラの行動が理解できれば、人間が理解できる」などと語り、会場は和やかな雰囲気になりました。

地球の歴史のなかで現在生き残っている生物は、従来言われたような生存競争の結果ではなく、共生によって残ってきた。自らの研究の足跡、研究仲間との関わりを織り交ぜながら、持論を展開。「争うことと助け合うこと、どちらが生き残るのか」と現在の世界情勢をちくりと批判しながら、共生の意義を説いた。

弘前大学では今春、22人の教授、准教授が定年退職する。2〜3月にはそれぞれ最終講義が行われている。